

吉田 武郎 (YOSHIDA Takeo)

上級研究員 博士 (農学)

2004 年 農村工学研究所

2021 年 農研機構 農村工学研究部門  
水利工学研究領域  
流域管理グループ 配属



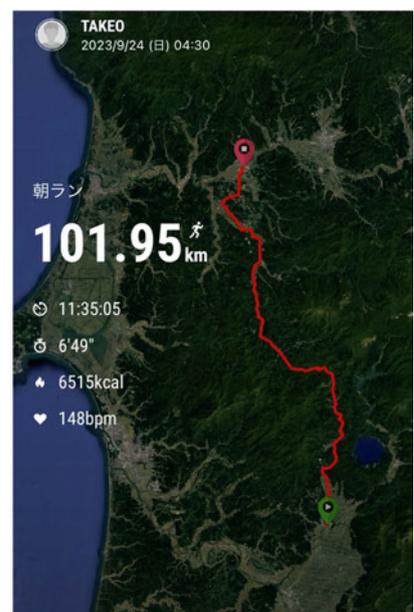
研究者の横顔

メルマガに寄稿するのは、在外研究先のアリゾナ大学から寄稿していたサボテン通信 (2014 年~15 年) 以来なので、ほぼ 10 年ぶりになる。10 年という時間で、私が経験してきたことを綴ってみよう。

10 年前に全く想像しなかった変化は、子供と一緒にラグビースクールに入って、プレイを楽しむようになったことだろう。ラグビーといえば、巨大な男達がフィジカルの強さを前面に打ち出して陣地を競い合う、マッチョなスポーツという印象を持たれる方も多いと思う。もちろんそれもものすごく大事なのだが、実はそれは競技の一側面に過ぎない。それ以上に頭を使うスポーツであることに驚いている。パスは後ろに放らないといけないという理不尽なルールのため、縦横の攻撃をうまく組み合わせ、次々に変わる局面をコントロールしつつ、ギャップをついて陣地を進める。テレビで見ると簡単そうに思えるのだが、これはやってみると非常に難しく、そしてまた面白い。屈強な肉食獣が襲いかかってくる中で知恵を使ってなんとか生き延びる、石器時代の人間のような気持ちにもなってくる。これまで剣道、マラソンと個人競技を楽しんできた私は、チームスポーツの魅力にどハマりしている。



私は今年で 44 歳になった。同年代のスーパースターであった小野伸二、遠藤保仁が相次いで現役を引退し、あのイチローでさえ 45 歳で引退したことを考えると、残された時間は長くないのかもしれない。そんな中、非常に暑かった昨年の夏に練習を頑張り、7 年ぶりに 100 キロマラソンを走ったのも刺激的な経験だった。タイムは良くも悪くもないところだが、できることはやりきったという充実感が残った。若いときと同じことはできないが、力を尽くしたときに得られる喜びは同じかもしれない。



少しだけ仕事の話も、ここ数年は、新しく出会った人と新しいことに挑戦するスタイルの仕事ができるようになってきた。自分の世界を築きつつ、多くの研究者、技術者、農業者と仕事をできたことに感謝している。アリゾナから日本に帰る直前に、”be patient” (辛抱強くな) という言葉をかけてもらった当時の指導教官に、コロナ禍を経て久しぶりにお会いしたら、今度は”no rush” (のんびり行こうぜ) という言葉をもらった。次の 10 年で何ができるか、そしてそれをまたメルマガに寄稿する機会を楽しみにしつつ、筆をおく。